

家祭としての孔子祭

欠端 實
千島 英 一

目次

はじめに

一、孔家の祭祀生活

二、孔子廟の機構

三、公祭と家祭

四、家祭の本質

まとめ

はじめに

今日でも、東京の湯島聖堂、足利学校、あるいは閑谷学校その他で、いわゆる釈奠が行なわれている。⁽¹⁾ 外国では、台北市をはじめとする中華民国諸都市において、例年釈奠が催されている。釈奠とは言うまでもなく公祭(国祭、官祭)としての孔子祭である。

孔子祭にはもう一つ、私祭(家祭)としての側面がある。筆者が一九八五年三月、曲阜において調査して感じたことの一つは、孔子祭を家祭という視点から見直すことの必要性であった。

小論で述べようとするのは以下の点である。まず第一に、公祭、家祭双方を含めて、孔家は祭祀を中心とする

生活を送っていたこと。第二に、孔家の家祭は、孔子を「始祖」とする家廟における祭祀であり、祖先崇拝であること。第三に、したがってこの点から言えることは、孔家が有する社会的、文化的な生命は、あくまで孔子に淵源すると考えられていること。そして、第四に、その祖先崇拝としての祭祀の中に、宗教的生命をも看取できること。

孔子祭を孔家の家祭として捉えてみる時、孔子祭が有する祖先崇拝としての一面を確認することができる。そのことによって、孔家の家祭としての孔子祭と、日本皇室の祭祀をも含めて東アジアにおける祖先祭祀との比較検討の意味が出てくると考えられる。この点は将来の研究課題としたい。

最後に、曲阜における調査の途次、北京で孔徳懋氏にお会いする機会を得たが、そのことが小論執筆の動機ともなったことを付言しておきたい。

一、孔家の祭祀生活

曲阜における孔家の祭祀には公祭（官祭）と私祭（家祭）とがあった。その数は年間どれ程にのぼるのであるか。孔徳懋氏の近著『孔府内宅軼事』^(三)によれば、孔家が携わった祭祀はほぼ以下に示す通りである。

- 一、四大祭。丁の日に行なわれるので丁祭と呼ばれる。仲春（二月）、仲夏（五月）、仲秋（八月）、仲冬（十一月）の最初の丁の日に挙行される。
- 二、四中祭。大祭後の十日目、つまり四仲の第二番目の丁の日に挙行される。
- 三、八小祭。清明節（三月）、端午節（五月五日）、仲秋節（八月十五日）、歳除（大晦日）、六月一日、十月一日、孔子の命日（二月十八日）、誕生日（八月二七日）に挙行される。

四、毎月行なわれる一日祭、十五日祭。

五、二十四祭。立春にはじまり大寒に至る二十四節氣に挙行される。

合計すると、これだけでも（重複を含めて）六四回である。この他に「事に因りて告祭す」^(三)こともあった。したがって総計すると年間相当数の祭祀が執り行なわれていたことになる。北京では、今日、孔子祭は行なわれていない。右の孔徳懋氏の回想記に述べられているのは、清朝あるいは民国期の孔子祭の様子である。そこで清代の文献に基づいて、清代に孔家の祭祀が数においてどれ程挙行されていたか確認しておきたい。

依拠した文献は、清の孔繼汾著『闕里文献考』と『闕里儀注』とである。同一の著者になる文献でありながら、孔子祭に関する記述において、内容、呼称等に若干異なる処がある。今、一覧表にして、比較に便ならしめようと思う。両者を相互に補充することにより、自ずから清代の孔家の祭祀の全貌を窺うことができる。（『闕里文献考』『闕里儀注』比較表参照^(四)）

『闕里文献考』『闕里儀注』双方に出入りがあり判然としない部分も残るが、いずれにしても、清代において、孔家は年間四十回以上の祭祀を執り行っていたことが判る。その祭祀の中には積奠のように、十五日前から一連の儀式が開始されたものもある。また前掲孔徳懋氏の回想録では、この他にも二四節における祭祀がなされたことになっており、それをも加えればさらに数が多くなる。こうした規模の孔家の祭祀が、いつの時代に始まり、どれ程の歴史を有するか不明である。現在の孔子廟の機構が宋代に出来上がったとされていることから考えれば、すでにその頃からの長い歴史を有したのではないかと推察も可能である。ともあれ、少なくとも清代以後、祭祀の数からだけ判断しても、曲阜の孔家は祭祀を中心とした生活を守っていたことを確かめることができたと思う。

『闕里文献考』、『闕里儀注』比較表

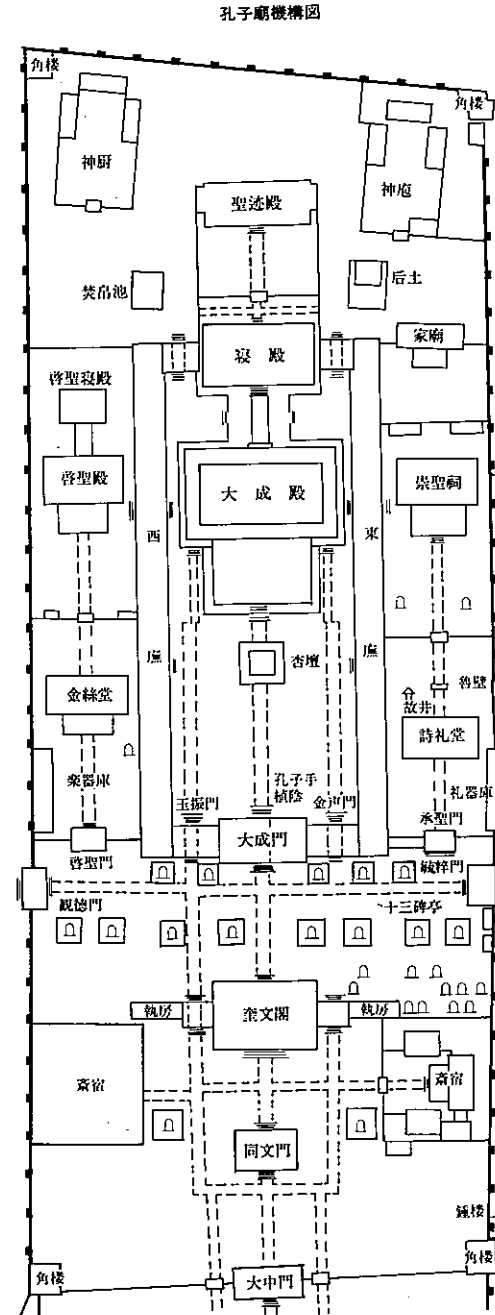
『闕里文献考』	<p>積 奠 大成殿・寢殿 崇聖祠 后土祠 家啓聖廟</p> <p>歲時常祭 家廟 元旦、上元 端午、中秋 重陽、冬至 崇聖祠 歲除</p> <p>月朔秋祭 大成殿・寢殿 崇聖祠 家廟 啓聖祠・寢殿</p> <p>月望行香 大成殿 崇聖祠 家廟 啓聖祠</p> <p>行香 每月十五日</p>
『闕里儀注』	<p>積 奠 大成殿・寢殿 崇聖祠 后土祠 時享(丁祭)</p> <p>啓聖寢殿 家廟 崇聖祠 啓聖祠</p> <p>常 薦 家廟 崇聖祠 啓聖寢殿</p> <p>行 菜 大成殿・寢殿 崇聖祠 家廟 啓聖祠 啓聖祠・寢殿</p> <p>積菜 每月一日 行香 每月十五日</p>

告 祭 家廟 崇聖祠 中興祖祭 始祖 二代 三代 中興祖 至聖先師誕日、忌日 尼山書院 書院内の啓聖祠 同 二世祖祠 同 三世祖祠	<p>祭 大事に従って 上香 臨時に挙行 (常祭に準ず)</p> <p>五月二十九日 上香 積奠に準ず</p> <p>誕日 忌日</p> <p>院 書院の博士が 秋 祭主 春秋 次丁日 五経博士祭主</p> <p>掃 聖墓 聖林 二世祖墓 三世祖墓 中興祖以下至衍聖公高祖 清明節 十月一日</p>
告 祭 家廟 崇聖祠 啓聖寢殿 四十三代公誕辰 家廟 先聖忌辰誕辰 尼山書院 命日 誕日	<p>因事 上香 告祭 (常薦に準ず)</p> <p>五月二十九日 積尊に準ず</p> <p>積奠 (二月十八日) (八月二十七日) 行香</p> <p>院 書院の博士が 春秋 積 上丁日 奠 五経博士祭主</p> <p>中興祖以下至衍聖公高祖 清明節 十月一日</p>

このような孔家の祭祀中心の生活が、ひいては曲阜に住む人々の精神的支柱ともなっていたに相異なく、この意味において「孔府と曲阜の人々とは孔子にたいする共同の信仰を有していた」と言われるのも故なしとしない。^(六)

二、孔子廟の機構

孔子廟の機構は歴代王朝の孔子に対する評価とともに、その構造に変遷があった。しかし、ここではその点に触れないこととする。現在の山東省曲阜の孔子廟中、家祭、公祭の祭場となった建物を中心にその機構を述べることとする。(「孔子廟機構図」^(七)参照)



大成殿。孔子廟の正殿であり、孔子廟の中心的位置を占める。公祭である釈奠が挙行される場所である。大成殿は宋の仁宗のとき初めてなったという。ここには至聖先師(孔子)の神位と四配と呼ばれる復聖顔子、宗聖曾子、述聖子思子、垂聖孟子の神位が祀られている。さらに十二人の先賢の神位もあわせ祀られている。大成殿の東西にある廡(回廊のごとき建物)には、先賢先儒の神位、合計一五五が祀られている。

寢殿。大成殿のまうしろにある建物で、孔子の夫人を祀る。

家廟。孔家の私祭の祭場となる処である。寢殿の東側に位置する。家廟には孔子夫妻が「始祖考妣神位」として祀られている。孔子は大成殿では「至聖先師神位」として、官から与えられた封号で祀られているが、家廟では孔家の「始祖」として夫人とともに祀られている。その他に二代祖として孔子の子の孔鯉夫妻、三代祖として孔子の孫の孔伋夫妻の神位が祀られている。これが「上三代」^(八)の神位である。家廟にはもう一組、四三代の孔仁玉(912~960年)夫妻(夫人として裴夫人、李夫人の二人の神位)が祀られている。孔仁玉は、唐末に続く五代の混乱期に、孔家の家系を正し孔家を再興した人であり、中興の祖と呼ばれている。以上、家廟には孔子にはじまる直系三代の夫妻と、後世の第四三代の孔仁玉夫妻の九柱の神位が祀られている。

崇聖祠(五代祠)。家廟の前に位置している。五代祠ともいわれるように、孔子の祖先を五代までさかのぼって祀る(ただし夫人は祀らない)。すなわち父の啓聖王(叔梁紇)、祖父昌聖王(孔伯夏)、曾祖父訖聖王(孔防叔)、四代の祖祐(裕)聖王(析父舉費)、五代の祖肇聖王(木金父)の五人である。但しこのように孔子五代の祖先を祀るようになったのは、極めて歴史が浅く、清朝の雍正二年(一七二四年)以降のことに属する。歴史の浅いことは、孔家の祭祀における崇聖祠の占める比重が、家廟に比するとき甚だ軽いことを示していると言えよう。なお崇聖祠には、孔子以前の先賢先儒十氏の神位も合祀されている。

啓聖祠。大成殿の西側に位置している。大成殿を挟んで東側に崇聖祠、西側に啓聖祠が位置する形をとっている。啓聖祠は孔子の父啓聖王(叔梁紇)を祀る。叔梁紇は崇聖祠にも祀られている。歴史的にみれば、父叔梁紇は宋代以来祀られていたが、先にのべたように清代雍正年間に至り孔子五代の祖を祀ることとなり、啓聖祠は崇聖祠と改められた。にもかかわらず啓聖祠は廃されることもなく、崇聖祠と併存して今日に至っている。

寝殿。啓聖寝殿である。啓聖祠の後ろに位置している。啓聖王夫人、つまり孔子の母、顔徴在を祀る廟である。后土祠。土地神である后土祠が廟内の家廟の裏手にある。ただしこの后土祠に対する祭祀に関しては、衍聖公自ら祭主となることはない。必ず別人を立てて祭主としている。

以上が現在の曲阜孔子廟内にある機構の内、神位が祀られ、公祭、私祭の祭場として用いられた建物である。各廟に祀られている神位をみるとき次のことがいえよう。

公祭の主たる祭場である大成殿には、孔子とその学統を継ぐ四配の神位が祀られている。それぞれ至聖先師、復聖、宗聖、述聖、亜聖と呼ばれているように、孔子を先聖(至聖)とする聖人の系列を祀り、聖人の偉大な徳を顕彰しようとするものである。後述するように、積奠は中国古来から伝わる「先聖先師」を祀る祭祀の流れを汲んでいる。ここには祖先崇拜の色彩はない。

他方、家廟では孔子が「始祖」として祀られていることから、家祭の祭祀は孔子を中心とした祖先祭祀であると言えよう。家廟には孔子の他、孔子の直系三代が「上三代」として、また第四三代孔仁玉が中興の祖として夫妻ともども祀られており、孔家の家系中、孔子に次ぐ人物と考えられていることを示している。さらに言うのであれば、命日の祭祀があるのは孔子だけであるが、誕生日に当たっては、孔子とともに孔仁玉も祀られている。このことを考え合わせれば、孔子に次ぐのは孔仁玉であり、ついで孔子の父叔梁紇、残り四人の孔子の祖先と続く

と考えるべきかも知れない。したがって敢えて序列をつけるならば、始祖、中興祖、二世祖、三世祖、父、祖父以上五世の祖までの四人、となろう。以上から判るように、孔家の祖先神といったものは祀られていない。(九)孔家の始源はあくまで孔子なのである。家廟での私祭としての孔子祭とは、孔子を祖先神とする祖先崇拜であると言えよう。衍聖公の最大の任務は「祖先を祀る」ことであつたと言われる理由もここにある。

三、公祭と家祭

(一)、公祭(積奠)

公祭とは皇帝あるいは皇帝派遣の官吏が祭主となって挙行する祭祀で、いわゆる積奠がこれにあたる。「大成の積奠は朝廷の命祀なり。家廟の時薦は子孫の私享なり」といわれるゆえんである。(一〇)

この積奠にも、清代の例でいえば、四種あつた。(一一)

- 一、太学に詣る積奠。皇帝自ら太学(国子監)詣って行つ積奠。春秋二回行つのが例である。
- 二、辟雍に臨む積奠。皇帝自ら辟雍すなわち帝王の大学に臨席して行つ積奠。

三、闕里積奠。皇帝が闕里すなわち孔子の生地である山東省曲阜の孔子廟に至り、その地で行つ積奠。

四、直省積奠。直隸省以外の各省で行つ積奠。積奠とは積奠の略式化された内容の祭祀である。

まず第一に、これでも判るように、積奠は必ずしも曲阜の孔子廟のみで行なわれるものではなく、太学、辟雍、あるいは又各省各地の孔子廟でも行なわれるものであつた。この点で家祭とは異なる。

つぎに、今日「積奠」といえば、もっぱら孔子を祀る祭りの事を指している。しかし歴史的にさかのばれば、積奠の際の祭祀の対象は孔子に限定されてはいなかつた。積奠とはいわゆる「先聖先師」を祀る祭祀であつた。

誰を「先聖」とし誰を「先師」とするかは、それぞれ王朝によって変遷があった。明の宋濂によれば、「昔、周、天下を有し、四代の学を立つ。そのいわゆる先聖なる者は虞舜はすなわち舜をもってし、夏学はすなわち禹をもってし、殷学はすなわち湯をもってし、東膠はすなわち文王をもってす」と^(三)。つまり、虞、夏、商(殷)、周は、それぞれ舜、禹、湯、文をもって先聖としたのである。

孔子が皇帝によって祀られるようになったのは、漢の高祖からである。高祖の十二年(一九五年)十一月、魯を過ぎた時、高祖は太牢(牛・羊・豕)をもって孔子を祀った。魏以後はだいたい孔子を先聖とし、顔回を先師とするようになった。しかし、時に例外もあった。たとえば唐の高祖や高宗の時には、周公を先聖とし、孔子を先師としている。清代に入り、孔子の封号は至聖先師となった。

隋以降、毎年、春夏秋冬の仲月の上丁の日を選んで先聖先師の積奠を挙行することとなり、今日に及んでいる。したがって曲阜における孔子廟で行なわれた積奠は朝廷の命祀であり、公祭であって、朝廷派遣の官が祭主となり、衍聖公が副祭主となって執行されていたのである。実際には衍聖公が祭主となって祝文をあげ孔子を祀ることもあった模様である。しかしそうした場合の積奠も「皇帝の令典にしたがった」^(四)式典であって、やはり公祭であることには変わりなかった。積奠の日には、大成殿に祀られている孔子以下の神位のみならず、あわせて寢殿、崇聖祠、啓聖祠、同寢殿、家廟、后土祠も祀られている。ただし積奠の際に衍聖公自らが跪拜する神位は、孔子と四配に限られ、他の神位にたいしては撰献官(代献官)や分献官が行礼する。さらに又后土祠にたいしては、別に祭主が定められる習わしであった。

(二) 積奠の内容

積奠は四時の仲月の第一の丁の日に行なわれる。仲月つまり四季それぞれの真ん中の月が用いられるのは「四

時の正」を選んだものとされ、丁の日が選ばれたのは、丁日が「陰火文明の象をとった」^(五)からであるという。さて積奠の式次第を孔衍沢の『聖門礼誌』^(六)によって示せば以下のようなになる。

積奠前の諸儀式

十五日前	1 滌牲	2 扱菜	3 出示
十日前	4 修器	5 演礼	6 演楽
五日前	9 挂牌	10 伝单	11 造册
三日前	16 張榜	17 迎祝	18 戒誓
		19 沐浴	20 齋宿
祭式十五日前から開始される諸儀式は衍聖公が指揮する。三日前のこの時点から祭主が儀式に加わる。			

二日前巳時

21 親礼

未時

22 聴楽

一日前寅時

23 迎犠牲

辰時

24 迎菜盛

申時

25 省牲

同上

26 視膳

早朝

27 習儀

酉時

28 給燭

29 陳設

30 驗祭

前夜

31 点榜

式典

当日 子時 32更衣 33序爵 34僉名 35序昭穆 36踐位 37行札奏樂

この37が釈奠の主たる内容を形成している。以下にその大略を述べる。

祭場の清め 瘞毛血

酌酒

招魂 迎神

献饌 上香

献帛

進爵

献爵

祭文奏上

読祝

撤饌

飲福酒

受肥肉

送神

望燎

以上で式典は終了し、以後は式後の宴席に入る。

38布席

39燕席

40旅酬

41分胙

37について見れば分かるように、式典の中心的内容は、迎神—献饌—共饌というコースである。これは釈奠に限らず、家祭の場合も同様である。この内容の意味するところを考えてみれば次の通りである。

つまり、偉大な有徳者の神霊を迎え、聖人としての孔子の霊に敬虔な態度をもって食事を進め、次にその食事を人間も共にする。目的は、孔子と共饌することによって、孔子の霊との結合をはかり、孔子の有した偉大な徳を受け継ぎ、自ら神聖さ（宗教性）を獲得するところにあったと考えられる。

(三)、家祭

右にみた公祭（釈奠）に対して、家祭とは「宗子の私祭^(三)」である。祭祀の種類としては前掲の表に示した通りである。既に述べたように引用した二つの文献に相異がみられる。これは、一方が正しく他方が間違っているといった性質のものではなからう。むしろ双方の文献は、互いに補充しあうことによって、清代の孔家の家祭なるものの輪郭を描きだしているのとみることができる。このように考えて大過なしとすれば、孔家の家祭とは以下のごときものであった。

毎月一日の釈菜

毎月一日に大成殿、同寢殿、崇聖祠で釈菜がおこなわれる。あわせて家廟、啓聖祠、同寢殿でも釈菜が行なわれる（ただし『儀注』では行香としている）。

歳時の常祭として行香

元旦、上元、端午、中秋、重陽、冬至、歳除の日に家廟、崇聖祠において（『儀注』ではさらに啓聖寢殿におい

て) 献香する。

毎月十五日の行香

毎月十五日に、大成殿、崇聖祠において(『儀注』ではさらに啓聖寢殿において) 献香する。(『儀注』においても啓聖寢殿を祠って大成寢殿は祠らない)

中興祖誕生日

第四三代孔仁玉の誕生日である五月二十九日に家廟で挙行する。始祖、二代、三代にたいしては献香だけにとどめられる。中興の祖に対してのみ積奠に準じた祭祀をする。誕生日の祭祀がおこなわれるのは、中興の祖と孔子のみである。ただし、『孔府内宅帙事』によれば、「上三代」、「下三代」に対しては命日、誕生日にそれぞれの祭りがあつたとのことである。

孔子の命日、誕生日

孔子の命日である二月十八日、同じく誕生日である八月二十七日には、家廟で献香し、さらに同時に尼山書院において積奠に準じた祭祀をする。なお尼山書院では、孔子の命日、誕生日には、同書院内の啓聖祠、二世祖祠、三世祖祠においても同時に積奠に準じた祭祀が挙行される。

告祭

告祭とは事に従って臨時に挙行する祭祀である。その時は家廟、崇聖祠において(『儀注』では啓聖寢殿においても) 常祭のごとく献香する。

書院での積奠

洙泗書院、聖沢書院で春秋の第二の丁日(『儀注』では第一の丁の日)に積奠する。洙泗書院では太常博士が祭

主となり、聖沢書院でも同様に五経博士が祭主となって挙行する。中庸書院では春秋の第一の丁の日に、五経博士が祭主となってこれを祀る。

掃墓

清明節、十月一日の二回、聖林の孔子の墓及び二世祖、三世祖、中興祖以下衍聖公の高祖に至る祖先の墓を清掃し、墓前の儀式を行う。

四、公祭と家祭の比較

ここで公祭と家祭との相異を簡単に表示してみよう。

公祭

家祭

呼称

積奠(積菜)

家祭

祭主

皇帝(皇帝派遣の官)

衍聖公

副祭主

(闕里の場合は衍聖公)

族長_(二)

期日

四仲丁日

四仲次丁、毎月一日・十五日、二四節

気、元旦、上元、端午、仲秋、重陽、冬至、歳除、孔子命日・誕生日、孔仁玉誕生日、清明節、十月一日等

祭場

太学・辟雍・闕里・各地の孔子廟

闕里(曲阜)の孔子廟

大成殿を主とす

家廟を主とす

神位

孔子・顔回・曾子・子思子・孟子

孔子・孔鯉・孔伋・孔仁玉夫妻

内容 先聖先師を祀る

祖先崇拜

孔子の徳を顕彰する

四、家祭の本質

(一)、孔子を始祖とする祖先崇拜である

家廟内には始祖孔子、二代祖、三代祖、中興祖各夫妻の神位が祀られている。先にも述べた通り孔家の祭祀の中心は孔子である。孔子が孔家の始祖として祀られているのである。孔子に先立つ祖先の神位は、家廟内には祀られていない。家廟における祭祀は、抽象的に孔家の祖霊全体を祀るのではなく、孔子という人間の存在——偉大な人格を備えた人物を祀るという所に本質的な意味があるとみてよい。孔家の子孫は、祖霊となつた時にはすべて孔子の霊に収斂されてしまい、個々の個性を喪失してしまう。家廟の神位から判断するとき、始祖（孔子）にたいする信仰が、家祭の基礎をなしており、孔家の子孫は、すべて孔子の内に吸収され、孔子に基礎づけられている、と言えよう。始祖というのは、中国の廟制における太祖廟や始祖廟に相当するものであると考えてよい。始祖として祀られるのは神話上の人物の場合もあり、歴史上の人物の場合もあるが、いずれにしても、始祖というのは歴代の祖先に超越した存在であることを特色としている。始祖とはいわば「歴史の始源に立ち、歴史の根源、歴史の雛形をなし、歴史全体を代表しながら、しかも歴史より超越するもの」^(三)である。その意味で、個性を失った系譜上の他の祖霊とははっきり区別されている。

始祖とならんで中興の祖が祀られていることが注目される。第四三代孔仁玉（九二二—九六〇年）は、唐末に続く五代の混乱した社会の中で、孔家の家系上に生じた混乱を正し、孔家の家系を継いだ。孔家における家系永続上の危機を克服したという意味において極めて重要な役割を果たし、かくて中興の祖として、祭祀の対象とされるようになったのである。

以上のように、孔家はその家廟における祭祀において、始祖としての孔子、中興の祖としての孔仁玉、更に孔子の子・孫の孔鯉・孔伋の四人とその妻をもって孔家の祖霊を代表させている。系譜上に連なるこれ以外の人物はすべて、いわばこの四人の霊（究極的には始祖としての孔子の霊）に吸収されるのであって、時々の祭祀の対象とはされない。

一般に家の生命という時、多分に文化的要素が含まれている。こうした観点に立てば、孔家の文化的、社会的生命の根源は、孔子の徳性の中にもとめられていることが判明する。家廟における家祭とは、孔子（あるいは右の四人）に淵源する生命、文化を貫ぶことに他ならない。そのために始祖を祀り、中興の祖を祀っているのである。

家廟とは別に崇聖祠、啓聖祠、同寢殿があり、それぞれ孔子の祖五代、孔子の父母が祀られている。先述したように、これらはいずれも、家廟に比する時、歴史が浅く、その重要性において家廟に劣ることは否めない。孔家の私祭は家廟中心に営まれてきたのである。

孔家の家祭の中で唯一神話的存在は后土祠である。炎帝十世の孫の句龍を祀ったものとされているが、由来、后土祠は、家にあつては宅神となり、国にあつては社となり、廟においてはよく不祥を呵禁し、神聖を護る神とされてきた。この后土祠に対しては、衍聖公は祭主とはならない。必ず別に祭主を定め、后土祠を祀らせた。あくまでも土地の守護神であつて、孔家とは直接の關係を持たない神位だからであらう。

(一)、始祖の聖性継受を目的としている

家廟における時享はその祭祀の中心的部分の内容がほぼ釈奠に等しい。すなわち、

祭場の清め	瘞毛血
招魂	迎神
献饌	上香 酌酒 奠帛 献爵
祭文奏上	読祝
共饌	飲福酒 受福胙
徹饌	
望燎	
焚祝	

ここに示されている祭祀の内容は、始祖の神位をはじめとする諸々の神位に献饌し、供え終わつた後に、その酒、肉胙を受けて、人々が祖神とともに共饌するというものである。ここに、中国の廟制における献饌と同様の意味を見出だすことができよう。すなわち、「祖神の祭法は、飲食を供進するところにその本義が存するという一点はあきらかであつて、この供饌、供饌の意義は共食などによつて神人の結合をはかろうとするものと見るべきであろう。齋戒によつて俗界より離れ、神秘主義的に神明に交わり、更に祭神に食を饗してその結合を強めることによつて、神聖さを得ようとするところに祭祀の意義が存するのである」と。^(三)

孔家の家廟における祭祀もまた、神饌を始祖の靈に供し、さらにそれを共饌することによつて、始祖の靈と交わり、聖なる世界に接し、始祖の保有する神聖性(宗教性)を我身に受け継ぐこととしたものであると考えられる

のである。

まとめ

以上、孔家の祭祀を、特に家廟における祭祀を中心に検討してきた結果、以下の点が明らかとなつた。

一、いわゆる孔子祭と呼ばれている祭祀は、公祭(官祭)としてのそれと、家祭(私祭)としてのそれと、性質を異にする二種の祭祀が混称されたものである。

二、曲阜の孔家では、公祭、家祭双方に携わつたが、双方合わせて年間相当数の祭祀を執りおこなつていた。年間に祭祀のために割く日数だけからでも、孔家は祭祀を中心とする生活を送つていた、といえるのである。

三、家廟は、孔子の神位を「始祖」として祀つている。家廟内には孔子の祖先を祀ることをしない。こうした神位の配置は、孔子こそ孔家の始祖神であることを物語つている。

四、右のことは、孔家の社会的、文化的生命は、すべて孔子に淵源していること、すなわち孔子こそ孔家の文化の創造者であることを示している。

五、家廟における祭祀の内容は、孔子の子孫(とりわけ衍聖公)が、始祖の靈と交わり、祖靈の偉大な徳性を受け継ぎ、「聖徳、聖脈を絶えることなく衍統」^(三)させようとしたものであることを示している。文字通り「衍聖公は孔子の血統と精神の継承者」^(三)なのである。

注

一 日本における釈奠に関しては、『古事類苑』文学部三三三、釈奠の項参照。今日、日本での釈奠に関して多くの写本が遺されており、筆者も、今回、「昌平学聖堂釈典式」「寛政十二年仲秋釈奠記」「釈奠儀注」「釈菜

儀注」「釈奠図」などを参照した。

- 二 天津人民出版社、一九八三年。「孔子の末裔」（和田武司訳、筑摩書房、一九八六年）は同書の翻訳である。
- 三 『關里儀注』巻中。
- 四 『關里文献考』巻一九、『關里儀注』巻中。
- 五 前掲『孔府内宅軼事』。
- 六 行聖公に関する筆者の質問にたいして、孔德懋、柯蘭兩氏より送付された回答書による。
- 七 『曲阜游覧図』（山東美術出版社、一九八四年）。
- 八 前掲『孔府内宅軼事』。
- 九 前掲孔德懋・柯蘭兩氏の回答書。
- 一〇 同右。
- 一一 『關里文献考』巻一九。
- 一二 中野江漢『釈奠』（東亜研究会、昭和九年）。民国期の釈奠については、馬場春吉『孔子聖蹟志』（昭和八年）参照。
- 一三 同右。
- 一四 『關里文献考』巻一九。
- 一五 呂元善『聖門志』巻四、洪若臯『釈奠考』。
- 一六 光緒十三年刊。
- 一七 孔繼汾『動儀糾謬集』巻上。

- 一八 前掲『孔府内宅軼事』。
- 一九 同右。台北の孔子祭においても夜明けに公祭が始まるが、それに先立って真夜中から家祭が挙行される。
- 二〇 諸戸素純『祖先崇拜の宗教学的研究』（山喜房仏書林、昭和四七年）。
- 二一 同右。
- 二二 前掲孔德懋・柯蘭兩氏回答書。
- 二三 同右。